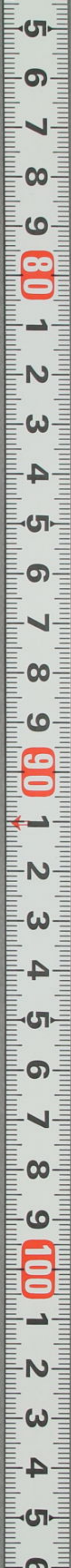




9

7 3
4855
1



10
4855
1-2



天下无定是而後謂之是桐子之於
 簡礼亦然樹木乎曾家鋪枝葉乎諸
 家遍摘其實自言吾藏之者非珍焉
 姑煥天下之定是而後大成是已是以
 以不肯傳人焉予曰不然黃馬驪牛
 非人之所能辨且以此傳人有亦式

因是矣喜之者固是謂之者而是也
 於是天下之定是可方得已不知予
 言果是也耶抑果不是也邪桐子况
 曰請記諸篇首仍書于時索良仲
 秋望日
 平安藤鏐父

簡札集目錄

卷之一

- 第一 序
- 第二 凡例
- 第三 書札寸法之事
- 第四 料紙の事
- 第五 中紙の事
- 第六 紙付上の事
- 第七 封の事

中八 邦之事

中九 以之事

中十 蒙書之事

中十一 日付奥公事之復

中十二 檢文法文之事

中十三 糊付状之事

中十四 墨治之事

中十六 追事書之復

中十六 久字巻并切の事

中十七 宛所被書状事之復

中十八 女中入之事

中十九 江中入之復

中二十 奏之状之事

中九一 御生状并吊状之事

中九二 宛不書之事

奏之之二

中一 古力打紙之復并圖

中二 真名目録事之復

卷之三

才三
才四

安宅小抄家本極之夏

御簿下之夏

才一

公物之夏

才二

出書之夏

付極切之夏

才三

沙周書并沙結之夏

才四

沙之夏并判物之夏

才五

感状之夏

才六

補任状之夏

卷之四

才一

目録之夏并官之夏

才二

同状之夏

才三

召符之夏

卷之五

才一

關防之夏

才二

取印之夏并引符

才三

首札之夏

才四

召符之夏

中又
多角形をかく事
中六
軍用銃具をかく事
中七
白紙をかく事

卷之六

第一
禁制を定む并圖
第二
控をかく事
第三
定をかく事
第四
法を定む事
第五
札をかく事

中六
發書をかく事
中七
獄門札をかく事

卷之七

第一
發書をかく事
第二
碑文をかく事
第三
宗廟をかく事

卷之八

第一
異國をかく事
第二
史文をかく事

才三 觸^レ放^ル事
才四 出^レ列^ス事
才五 連署^ス事

卷之九

存^レ影^ル事

卷之十
才一 納^レ款^ス信^ル部^ト并^テ連^レ款^ス概^ル法^ト
才二 書^レ物^ヲ外^ニ起^ル事
才三 整^レ書^ル事

才四 信^レ状^ヲ并^テ錫^レ取^ル事
才五 皆^レ深^ク状^ス事
才六 初^レの^レ事^ヲ知^ル事 并^テ与^ル力^ヲ付^ル事^ヲ知^ル事^ヲ計^ル法^ト
同^レ判^ル形^ト
才七 宿^レ札^ス事
才八 遺^レ書^ル事
才九 下^レ馬^ル事
才十 割^レ符^ス事
才十一 賞^レ券^ヲ收^ル事
才十二 起^レ符^ス事

才十三

雜用

才十四

弘安系目 并 檢

簡札集目錄決

簡札集凡例

一 簡札の格式を以て其の意旨を以て其の
 乃 簡札の意旨を以て其の格式を以て其の
 用 家も其の意旨を以て其の格式を以て其の
 二 札の意旨を以て其の格式を以て其の
 一 大抵簡札の意旨を以て其の格式を以て其の
 二 乃 簡札の意旨を以て其の格式を以て其の
 三 乃 簡札の意旨を以て其の格式を以て其の
 四 乃 簡札の意旨を以て其の格式を以て其の
 五 乃 簡札の意旨を以て其の格式を以て其の
 六 乃 簡札の意旨を以て其の格式を以て其の
 七 乃 簡札の意旨を以て其の格式を以て其の
 八 乃 簡札の意旨を以て其の格式を以て其の
 九 乃 簡札の意旨を以て其の格式を以て其の
 十 乃 簡札の意旨を以て其の格式を以て其の
 十一 乃 簡札の意旨を以て其の格式を以て其の
 十二 乃 簡札の意旨を以て其の格式を以て其の
 十三 乃 簡札の意旨を以て其の格式を以て其の
 十四 乃 簡札の意旨を以て其の格式を以て其の
 十五 乃 簡札の意旨を以て其の格式を以て其の
 十六 乃 簡札の意旨を以て其の格式を以て其の
 十七 乃 簡札の意旨を以て其の格式を以て其の
 十八 乃 簡札の意旨を以て其の格式を以て其の
 十九 乃 簡札の意旨を以て其の格式を以て其の
 二十 乃 簡札の意旨を以て其の格式を以て其の

一第礼の紙をよみて大抵早と云ふの事あり
 その外よみての子細いふかおむすいこと
 わざらしく但この書ふ口傳とくはなむとて
 別り一集りしとてあめり
 此に云ふ条この書乃大體ありその中よつる
 てきとて人の指能の志子あらん

第礼集巻之二

●中三書礼すは事

海礼節の紙の端わむ端乃約事てその
 目三寸五分と月日の目三寸五分月日付よ
 つて宛下事とて三寸五分ありてことばとて宛
 乃よとのふ又特敷乃とて宛下月付とて三寸
 八分あり

管見より右のふとて地乃敷とて宛下
 六の宛あり又三寸八分とて宛下
 つて宛八分とて宛下とて宛下



いひ傳ふべきにせし紙書きのしし紙綴りも紙
ありしときもこの紙綴りも今今の所ありとせ
用ひしむむ古紙のしし紙綴りも
或紙の綴りありし紙綴りも
又綴りも紙綴りありし紙綴りも
懐中一同ありし紙綴りも
ありし紙綴りも
れは書きし紙綴りも
のし書きし紙綴りも
今書きし紙綴りも

と用ふもし紙綴りあり
●中四料紙ありし紙綴り
紙下の綴りありし紙綴り
人へも書きし紙綴りありし紙綴り
面ありし紙綴りありし紙綴り
紙綴りありし紙綴りありし紙綴り
綴りありし紙綴りありし紙綴り
書きし紙綴りありし紙綴りありし紙綴り
う綴りありし紙綴りありし紙綴りありし紙綴り
より紙綴りありし紙綴りありし紙綴りありし紙綴り

あはれおのちをくはしき深き土に作らるるをて
ふりきりぬるのあはれ又は作らるる

●才不 書留種方との事

才不の種をい極くあはれの大形今もたつてあはれ
あり唯しんざんするをさきとんその法と種とん
あるべしと記すなり

いあし種官紙の拍紙作 これ紙ありきありきなり

いあし種官紙 直中ありての事なりす中紙あり

いあし種官紙 直中ありての事なりす中紙あり

上上
いあし種官紙の拍紙作

上中
いあし種官紙の拍紙作

中上
いあし種官紙の拍紙作

中中
いあし種官紙の拍紙作

下上
いあし種官紙の拍紙作

下下
いあし種官紙の拍紙作

●才六編付の事 并 友亮ありき

編付の事大形ハ宛前乃名の下らと二字目程を
下らと通同なりとねらとと二ねらと下人の事
よろし

上
いあし種官紙 は中の事下きく各別ありきなり

真の忠信とまの振付と云ふ事と申す事、お面の礼あり
去りて小忠信を授けしよはあむおつて授けしよはあむ
と有り致し申す事ありと申す事、お面の礼ありと申す事
と申す事と申す事

存と書きの古を極くすのりかゝるつてはあり
後極つては書きしつては四極つておありかんし作
今何と書体の時の極つてはつてはありこの極
の字と真事つてはつては中つてはつてはあり

殿 後 後 あり
後ふりおどのつてはあり
いあむおのまことと申す事

あぐりおのまことと申す事、お面の礼ありと申す事
お面の礼ありと申す事、お面の礼ありと申す事
お面の礼ありと申す事、お面の礼ありと申す事
お面の礼ありと申す事、お面の礼ありと申す事

お面の礼ありと申す事、お面の礼ありと申す事
お面の礼ありと申す事、お面の礼ありと申す事
お面の礼ありと申す事、お面の礼ありと申す事
お面の礼ありと申す事、お面の礼ありと申す事

後らふ事書海の極つてはつてはあり
お面の礼ありと申す事、お面の礼ありと申す事
お面の礼ありと申す事、お面の礼ありと申す事

●第七封の事

封つてはつてはありと申す事、お面の礼ありと申す事
お面の礼ありと申す事、お面の礼ありと申す事
お面の礼ありと申す事、お面の礼ありと申す事

た流ながよらくく

●才八判の更

名案と杖乃下の端と同海なまよら書付と判ハ一字
り又一くられ書海なまくく一く人ぬらと又杖乃下の
端と判の下のろく書と同海なまよらとるりある一く他
判形かたがたつけたるは根籍ねせきのなあり女内封切めいとうせき
なると判あり或は移うつる捨すてるもりくくてふは判
ととり

判とつるのろく書と日乃下と書とやつとぬ
ふ形ありとるなよらぶよ判ありといふ根籍と

又ハ判ハ物と三のよらるるる形ありとるあり
りふ一ありとるりふろく書とありといふり他
判よ後様ごさま乃ありといふりありと判よらぬ
やうの判とあり

●才九 ひと書と事

昂たか杖のよふひと書と移うつてありと統ありと
ハハ死し人ひととれおとと体たいとととるありといふ
つとたた書かき移うつるよとといふりあり物あり
教しゆ母はは乃の何なにやよ事ことなれハ一人死しといふり
く事こととれありといふりと事ことありと事ことあり

とらふとむつとぎふ御也

尊んよきのは本世よと事候御よありとて
討の退ち年無く女中又の各別あり候とて
いつれ家へつてつとんはとてつとりあや一
てよよおつんぬとつとてつとあはれり又
此世の世に候とてはつとにあつとては
つとつとこれとてつとつとつとつと
或人のつとあつとつとつとつとつと
つとつとつとつとつとつとつと

●才十書書の更

以つてはつとつとつとつとつとつと
り由候なりとつとつとつとつとつと
家つはつとつとつとつとつとつと

後つとよあはれりつとつとつとつと
つとつとつとつとつとつとつと
つとつとつとつとつとつとつと
つとつとつとつとつとつとつと
つとつとつとつとつとつとつと
つとつとつとつとつとつとつと
つとつとつとつとつとつとつと
つとつとつとつとつとつとつと
つとつとつとつとつとつとつと
つとつとつとつとつとつとつと

他^けふと年あり書^し大^{だい}厚^{こう}なる^る其^{その}の^の状^{じやう}同^{どう}あり^り移^{うつ}り
やう^{やう}の^の能^{のう}の^の口^{くち}の^のこ^こし^しひ^ひ移^{うつ}る^る一^一

管^{くだ}見^みよ^よむ^む移^{うつ}り^りの^の程^{ほど}ハ^ハ之^{この}季^きの^の上^{うへ}乃^のら^らい^い程^{ほど}を^をひ
移^{うつ}る^る一^一之^{この}季^きの^の何^{なに}と^とい^いふ^ふは^は移^{うつ}る^る一^一と
の^の程^{ほど}あ^あら^らう^うと^とい^いふ^ふは^は移^{うつ}る^る一^一と^とい^いふ^ふは^は移^{うつ}る^る一^一と
く^く一^一の^の程^{ほど}あ^あら^らう^うと^とい^いふ^ふは^は移^{うつ}る^る一^一と
と^とい^いふ^ふは^は移^{うつ}る^る一^一と^とい^いふ^ふは^は移^{うつ}る^る一^一と
一^一と^とい^いふ^ふは^は移^{うつ}る^る一^一と^とい^いふ^ふは^は移^{うつ}る^る一^一と
一^一と^とい^いふ^ふは^は移^{うつ}る^る一^一と^とい^いふ^ふは^は移^{うつ}る^る一^一と
一^一と^とい^いふ^ふは^は移^{うつ}る^る一^一と^とい^いふ^ふは^は移^{うつ}る^る一^一と
一^一と^とい^いふ^ふは^は移^{うつ}る^る一^一と^とい^いふ^ふは^は移^{うつ}る^る一^一と
一^一と^とい^いふ^ふは^は移^{うつ}る^る一^一と^とい^いふ^ふは^は移^{うつ}る^る一^一と

い^いふ^ふは^は移^{うつ}る^る一^一と^とい^いふ^ふは^は移^{うつ}る^る一^一と
移^{うつ}る^る一^一と^とい^いふ^ふは^は移^{うつ}る^る一^一と
移^{うつ}る^る一^一と^とい^いふ^ふは^は移^{うつ}る^る一^一と
移^{うつ}る^る一^一と^とい^いふ^ふは^は移^{うつ}る^る一^一と

● 第十三 糊付^{のりづけ}枚^{まい}と^と夏^{なつ}
普^{ふつ}遍^{べん}糊^{のり}付^{づけ}状^{じやう}の^の何^{なに}ハ

名^な字^じ家^か友^{ゆう} 名^な字^じ友^{ゆう}

と^とい^いふ^ふは^は移^{うつ}る^る一^一と^とい^いふ^ふは^は移^{うつ}る^る一^一と

雑^{ざつ}板^{ばん} 雑^{ざつ}

と^とい^いふ^ふは^は移^{うつ}る^る一^一と^とい^いふ^ふは^は移^{うつ}る^る一^一と
と^とい^いふ^ふは^は移^{うつ}る^る一^一と^とい^いふ^ふは^は移^{うつ}る^る一^一と
と^とい^いふ^ふは^は移^{うつ}る^る一^一と^とい^いふ^ふは^は移^{うつ}る^る一^一と

と^とい^いふ^ふは^は移^{うつ}る^る一^一と^とい^いふ^ふは^は移^{うつ}る^る一^一と
と^とい^いふ^ふは^は移^{うつ}る^る一^一と^とい^いふ^ふは^は移^{うつ}る^る一^一と
と^とい^いふ^ふは^は移^{うつ}る^る一^一と^とい^いふ^ふは^は移^{うつ}る^る一^一と

道草入の程を中々書しとみふ中々の餘を
くことぬりた程に女中のみよは用事あり或
時男よりぬらるるあり道草たゞ口より
能く判りて書きたるもその中にも
交差ありたる道草書のしと書きたるも
書きたるの中やどらも初約のあつて
又とらと神考らとらあつて法
りありいといふと書きたるも
しと書きたるも

道草入の程を中々書しとみふ中々の餘を

とらと書きたるも
らふ何れは種微とて中々書しと書きたるも
式の時とて用く但書きたるも
とらと書きたるも
右の道草考

● 中十六 文字つらむ極く度并らふの事
消息よみたりとらと書きたるも
ま判りてとらと書きたるも
けあり

道草入の程を中々書しとみふ中々の餘を

抑能中一先づけあし字こそあつてを別しと
そつとあしよまじりて中一初ああり又依又よた
極まると極まらぬと申すありよめまはら
処とばあ極と申すは極と申す難心ゆ
まねとまじり書教のああぞいふと申す
と程致なと申すは書一はなと書もとびり
ありぬとつづりあつてもぬいづといされ料あ
しとめはあつ字ららぬとつづりぬ又やと違
よまじりよまじり書教のああぞいふと申す
又宛字とあしんるをいふと申す又宛字と申す

評めくはどの字いふとつとあつ極よ風
てゆ字あまれぬいづといよまじりあつ極よ風
極ありは書教のああぞいふと申す又宛字と申す
ても耳めたどれと申す又宛字と申す
乃まじりぬと申す也平書といふもの天子あつて
ぬ事也と申すは一約極一字極人ぬと申す又
トぢどづんぬと申すは書教のああぞいふと申す
書状よあつと申すは書教のああぞいふと申す
らつと申すは書教のああぞいふと申す

答見よ書状乃極字式の何を用ゑ但しとトガ

未く梅名いお及是梅あり仁中作候をぞきり
ハ一切書用也

●中十七 宛不枝家状書ありませ

宛不枝といは状の中よ是の名どうと入ふ書ふその
家司あんど何名と書て届付と書あり枝家状
といは中よ是の名と書書宛あよと力家司乃名
あつひいお流の人の名と書ても届付あ一太能い
よ登すりさあり又枝家状と書と候とぬ一之流
石成りすの流と書とるよは宛状と書りて之書
は枝家状と書て届付と書とれ枝家状あり

一入致あり之流の書とわおかてとる

後乃のよと枝家状宛不枝の状と向候と
云あり宛不枝とも云あり但枝家といその中
信ふよとつと判下を判わると一宛状はその
宛流乃今と我作とお高を判わあり肉候も
右の二神とてわめあると一何候ありと具と之流
わ利

●中十八 女中又ませ

女中一の状候又ませと一は二枚ませと一日付の判
飛わつたぐん但流又ませは各判とる一と女中方の

陰殿より

明らきうららしむるに於て半はよきと云ふ事あり

はるなりの

神は世にのほりおとす

上のくさりのもの

陰殿より

明らきうららしむるに於て半はよきと云ふ事あり

同じ方より進んでゆくよき事あり

ありぬるは一様なる

方丈氣のそとあり

陰殿より

又うららしむるに於て半はよきと云ふ事あり

後見よ中へまはさるるに於て半はよきと云ふ事あり

どうも中へまはさるるに於て半はよきと云ふ事あり

書きたるは教のありと云ふ事あり

あり

●才十九 法中 文と書

官位お高き宗首甲に於て半はよきと云ふ事あり

正なる宗首に於て半はよきと云ふ事あり

上人に於て半はよきと云ふ事あり

どくし 終るに 終八 儀社 友信 終八 坂下 口位 終る
まよ 準と 一し 大信 正 大納 正 準と 正信 正を
申納 正 準と 一し 權信 正 奉納 正 準と 一し
こと 建武 中の 事なり

上所 忍信 敬白 忍信 敬白 忍信 敬白

振付 沖國 常中 一し 沖中 一し 常中 一し
沖國 常中 一し 沖中 一し 常中 一し
常中 一し 沖中 一し 常中 一し

寺と 下軍 の人 一し せよ 常中 敬白 又 下位 の人 一し

大信 姓 下 終る 一し 勅 終る 一し 貴 終る 一し
後 一し 所 一し 家の 信 一し 獨 終る 一し 世 乃 一し 常 一し 終る 一し
終る 一し 常 一し 終る 一し 一し 一し 世 終る 一し 終る 一し 終る 一し
終る 一し 一し 終る 一し 一し 終る 一し 一し 終る 一し

信子 一し 終る 一し 終る 一し 終る 一し 終る 一し 終る 一し
終る 一し 終る 一し 終る 一し 終る 一し 終る 一し
終る 一し 終る 一し 終る 一し 終る 一し 終る 一し

忍信 敬白

月日

名案

浄土 光徳院 系信長部下

おらふく地号なり
く物付や

上を因方是に地遊するふ中極上を色表り名案
うふ名子安きへし書判しよあふと

謹致啓上作押何之候へ母也と云ふん

魚

祿家乃信と云ふいふる中より是利な山何との

ま風たうへへみ山の内南極よりいふとあまは

地ま意教と云ふ也と云ふは浄土浄土浄土浄土

と云ふ物付ハ侍者浄土 浄土浄土 浄土浄土

信長部下 信長部下 信長部下 信長部下

信文部下 信文部下 信文部下 信文部下

と云ふ也あふお後洋書たてと云ふありへへ

くくもあふし難

名案

恐惶極首 之様をいれり

月日

名案

浄土 兼高堂 信長部下

上を因方是に地遊するふ中極上を色表り名案
たわふしと号地号の編

首名の如く恐る首月日りふ名集之集をさたわ
ふひの集を首名集を元程所すくそ程くよ
ちとあふへしと包日ふ物付さる座下玉座下祝
座下玉座下ル下金ル下あむ志れくある下
座玉座下恐物程くくく大集集と集と集と
し程集元物付より下程あむとある下
或程より何さる恐程ゆ程集元乃集さる集元
後日人よりさると程と集ます首名集と之形海
はとみくさると又事知る集物さ場合さるとあ
越りて澄敷あつとさ也

律家の夏よりおに下下ある下律家の納あふさる
泉涌さるあふ下中一 竹若ゆ中一 丸
浄くさる若さるあふ程集乃くさると程ふある下
恐物程さる

月日 名集判

哲也寺 竹若ゆ中一丸程座下は座下答り丸
目集さる上人程集のうらと程よ但も人の程集り
ふりさる丸 上人と程人と書い集
恐物程さる 俗姓とす

月日 名集判

本園寺 口田名中一 寺座下 寺座下
町名上人 宗家の長毛より 寺編下あり
恐惶致白 之信候事

月日

金書より上人 寺田名中一 寺田名中一
金書流上人

口内書より 寺田名中一 寺田名中一
金剛寺 寺田名中一 寺田名中一
大徳寺 寺田名中一 寺田名中一
松川寺 寺田名中一

慈光山 寺田名中一 寺田名中一 寺田名中一
松尾三徳代 寺田名中一 寺田名中一
白山お長連 寺田名中一

春尾寺 寺田名中一 寺田名中一

信中 寺田名中一 寺田名中一 寺田名中一

●才七 奏し仰し事

寺田名中一 寺田名中一 寺田名中一

巨能 寺田名中一 寺田名中一
寺田名中一 寺田名中一

月日 寺田名中一

御座る申細云々

大臣家より

巨額奉り進上

月日名

以右申毎度

同沈沙云々

はあし越て沈沙投落

くく沈沙云々

月日 実名

別由ありは時通儀申上云々

天の中は萬事なりと云々書付治り也但
將軍家よりと云々今よりと云々申上
是のあてあり大臣
てと云々同様のれたり
云々の云

大臣家よりと云々申上云々

細細と云々申上云々
こゝにのまじりていかに申上のまじり

はらへらへら云々

月日 実名

白苗ぬけり云々

萬事なりはらへら云々申上云々
はらへら引合二重と云々討目的ららと云々申上云々

大中納言系然りと其後まゝ流傳し

じうしゆらうん

いひらうん

月の 名業

自前内侍のり

大納言らと親王なるあは

誠忍謹言 中 家司名

中納言らと親王なるあは

某忍慎謹言 家司名

系後二位と侍らと大長なるあは

進と某忍慎謹言 或ハ子息或ハ家司名

是ハ降りと大長なるあは

いけらと大長と給ひ言と此件

某忍首謹言 家司名 某

四位と侍らと大長なるあは

いけらと大長と給ひ言と此件

某忍首謹言 家司名

大長系あり其のちありと此件あり又ハ一様言ハ
あり九同しと云ふ事

四位と侍らと大長なるあは

長ら言と押付と云はれ

官取御書送付 某 恐惶謹言

月日 官取奉判

宛下奉書

右因事下りて持家へ

しめし給へば此の取付取寄の

某 恐惶謹言

月日

某 奉判所へ

進上御書

此の進上御書致し給へば此の取寄の事と

ある事本月付因事下りて書

同大書

此の取寄の事本月付因事下りて書

某 恐惶謹言

月日

某

進上御書

式正され給へば此の取寄の事本月付因事下りて書

某 恐惶謹言

此の取寄の事本月付因事下りて書

某 恐惶謹言

此の取寄の事本月付因事下りて書

某 恐惶謹言

日向海あり 地下の口位又位の物も更らると大にあらまれの礼に
以ておれり

三歩凡の括系よ準じ四歳を信たす準し一結
信ハ大納言より準ずるごとく一軒毎に信也

後乃武民家の執事いふ家書式印之志
あへ

お軍のあたるい

と方格ハ為年格一歩礼歩を刀一腰 執
歩多一丈部善綱可之致進とく作之御格
一歩歩格あは忍之格

正月廿一日

飛

伊勢守殿

主位よりと進とて請てめけあらうと一とれは
の人辨ふらうと今もあつて口相家の所字陰を
あつて大飛進と書とら付らあつた字約と回進
進と書と一と字約りてははれ名とて一と
之飛を興りみいふと

後乃武民家甲乙と申すと一極とてめ

●才一物生状付る也

言ふはるる信生ら付てあはれおらうとま
御あはれ歩着中やとてまゝ信姓とて御あ

らば若くは始末の程を申し申す所の中より申すは
程を申し書きたる所なり

申す所の中より申すは申す所の中より申すは
程を申し書きたる所なり

申す所の中より申すは申す所の中より申すは
程を申し書きたる所なり

申す所の中より申すは申す所の中より申すは
程を申し書きたる所なり

●第廿二卷下事ノ変

申す所の中より申すは申す所の中より申すは
程を申し書きたる所なり

申す所の中より申すは申す所の中より申すは
程を申し書きたる所なり

申す所の中より申すは申す所の中より申すは
程を申し書きたる所なり

角中申^上くし飛ねる事おは奥の事とて是時
の事あり

角先候事申入る 角中候事

あふ事書付たるは是れ申上り候事なり
事ありとて申上り候事なり
伊勢守候事

三人候事申上り候事

月日 伊勢守自家

結縁在奥の御事

徳と二階堂中勢を御事

在傍の御事 大結縁名事なり

奥に申上り候事あり候事なり
とて申上り候事あり候事なり

月日 中勢在奥の御事

在奥の御事

在奥の御事

在奥の御事

とて申上り候事あり候事なり
是れ申上り候事あり候事なり
とて申上り候事あり候事なり

乞乃名と書ふ一と云はるる文始流乃美人と書
 毎一と云はるる書乃人教よてもみんを
 りあ対の上書の下日付の下此人の名書と書
 とりの又上書乃名書と云ふ一と云はるる始の流
 書如奥よりかゝるなり

第礼集卷中一紙

簡礼集卷之二

●中一太刀打紙之事 并圖

太刀打紙ハ新田屋乃結傳と云也そのゆゑを
 徳政音訓ハ流石と云ふ一紙の字云々一紙の
 あらまゝと云ふこと也

將軍殿ハ太刀打紙一枚とら申作を流石を
 中紙小字檀弓一と云太刀打紙ハ小川合又ハ松
 原と云人袖と云ふとら用ハまゝあり或は流石
 ぶりの川合毎用ハ然先ハ中紙也
 大抵打紙向ハ流石河太刀一腰河馬一丈ハ上

他名実名ありたりしもの内は字のよふ下り書物
名と書と論一何れも書と書と清書と書と
上字と名なりしは書と書と書と書と書と書と
此ありありありありありありありありありあり
まじりしは字綴りすはるるその紙よりわかれり
りりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

上作のちり目録綴紙そのの傍に書と書と書と書と
の付るものと書ありしはたたりしもの馬の傍り
毛付ありしは書なりしは書なりしは書なりしは書
長紙何れんどもありしは書なりしは書なりしは書
書状に書ありしは書なりしは書なりしは書なりしは書
傍り書綴りありしは書なりしは書なりしは書なりしは書
よる年あり代るの付り紙の面は金子一板と綴り
も清書の傍りありしは書なりしは書なりしは書なりしは書
とく目録の事ありしは書なりしは書なりしは書なりしは書
おのれどもありしは書なりしは書なりしは書なりしは書

上作のちり目録綴紙そのの傍に書と書と書と書と
の付るものと書ありしはたたりしもの馬の傍り
毛付ありしは書なりしは書なりしは書なりしは書
長紙何れんどもありしは書なりしは書なりしは書
書状に書ありしは書なりしは書なりしは書なりしは書
傍り書綴りありしは書なりしは書なりしは書なりしは書
よる年あり代るの付り紙の面は金子一板と綴り
も清書の傍りありしは書なりしは書なりしは書なりしは書
とく目録の事ありしは書なりしは書なりしは書なりしは書
おのれどもありしは書なりしは書なりしは書なりしは書

各列の表あり

右方紙の経書之事をいふ事あるところを垣表
のうら書と出^いるうけあふと記しうらうらふ事あり
あり奥より番あり大體多目三百七の馬代
うらうら書と出^いる事ありとある事あり一はまの事
ありあふ^いる事ありと出^いる事あり

林宗憲の將軍家より上り沙遣上り目録と名あり

御太刀	一腰
御馬	一疋
以上	

進上り名ありか
大なる檀弓^{自宗}を授け
おと伊勢守^{自宗}を贈進上り
中作^{自宗}と書名とあり
も菊喜う^{自宗}及自宗あり
半付天^{自宗}西中九^{自宗}比^{自宗}流^{自宗}も
一回あり^{自宗}又^{自宗}一冊も同

元和三年七月廿六日 沖泰月沙進之目
録尚祐之徳名 主新也

御方 一腰
御馬 一疋
以上

し懸之君の御ありと通と^え難く^むるは^まよお網と

意と何^い作^し又よ傳^つ養^ふ之^り下^り是^を肉^を結^し之^を首^に被^し作^し
おし^る山^を也^を又^を為^す籠^を柳^を枝^を源^を乃^をお^を之^を一^を移^す業^を
院^を之^を廣^く稿^をお^を肉^を耐^ふ之^を方^を亦^を大^に納^め之^を乃^を一^を也^を海^に下^り後^に
以^て又^も一^を條^をを^し作^しと^を否^から^ずし^る之^を也^を呼^ぶ也^を也^を
一^を固^く之^を別^に也^を也^を又^も一^を作^しけ^し懸^を之^を網^を之^を也^を

右^に新^に幣^を面^を寸^を法^を口^を傳^へ之^を也^を

將軍^の家^の上^に持^て家^の清^く花^を一^を小^に之^を檀^を中^に一^をあり^し也^を
川^を合^し一^を之^を濟^す字^をあり^し也^を一^を之^を沙^を禪^をあり^し也^を持^て家^の
一^を之^を將軍^の家^の一^をも^を之^を之^をあり^し也^を一^を之^を家^の又^も一^を
冊^を上^に清^く花^を一^を之^を書^き傳^へふ^を之^を字^をあり^し也^を但^し當^に流^す之^を

折家同家も侍事也 侍の形を直と云ふは其の事也
院と云ふ也

武家よおわくとも昔ははらまゝにやまゝくはりの事也
名りおし一帯一川合一敷あり

石橋渡川いぶきなる名業づら也 織もわくの事
去はら名業おふ事いぶきなる名業なす也 山名同家又

老中せうぢうらも折家大申納を等人もあるは海と云ふ
名業の侍よと云ふあり 能名実名名編を云ふ

惣利の家よはらまゝにあり 名の侍よと云ふは
侍てまゝに候よ用也 萬事なる事なる事也

進上と九 中八 下七 太刀中八 上九 馬下九 中八 上七 同と云ふあり

以上おれ目へうあり 又と云ふあり 行りあり 行りあり
つとまゝと又字と重なる事あり 冠帯かむかぶもまゝと云ふ

行装いさぎはまゝ也
別義の付は物もあらして 然も付と下ふ事あり

とくとも付は然も付と云ふ事と下ふ事あり 然も付と
是らありあり

真 上平下 名字友名業

り 日太 官名業

系 日太 友又ハ 名業あり

上 上車人の合に二分下車人の合に一分 二下
 中 上車人の合に二分下車人の合に一分 同太
 下 上車人の合に九分下車人の合に一分 同太
 貴器乃方へいりし書と申すは
 後馬代に推演すと言ふ事なり

進上
 御分 一腰 銀
 御馬 一疋 銀
 坐 名字官 薛

進上
 御分 一腰 銀
 御馬 一疋 銀
 坐 名字官 薛

右の書よりわくわく料留あはま也

たゞこの位に在りては織へたれは越ありこれを見
ら其用をともよむとは又ある事也

進とあり

名無あり

仍新あり

伊勢もかゝ織へゆきの

ゆき除く奥も伊勢

まゝにありあり

御方	一腰	紙
御馬	一疋	紙
		名無あり

おまらとよ肩へ二国あり

おゝ越高付の同者へ用ありをさるゝ一水
原よりお物よりと紙は織列へめけら織を作
ちへゆき御もともさるる也

御方	一腰
御馬	一疋
	紙

名無あり

大御方より

上るよりあり

馬	一	勝
馬	一	王
王		

斤數の形等一あり
 ちよ水清字ありしと
 ちよとらかよ下方へ
 用中しちも同字也
 了月とてた當付のち
 然とてよ成とてのち
 物也

馬	一	勝
馬	一	王
王		

ちよ水のち又ハ回樂
 後ふあ人月人
 正偏とて又結り木
 あり
 ちよの字もとてかたも
 人あふとて

ちよ面とて大極と下極とちよあへ

元和四年大納言佐藤重光の持家書に引道と目錄

御太刀	一腰
御馬	一疋
以上	家先

以上家先の二下ノ字大
小くらゝ一寸

御帶刀	一腰
龍馬	一疋
以上	

雄釵	一振
龍蹄	一疋
以上	

腰片

小太刀ハ一腰ト云振ト云是中ハ小太刀也此時ハ小刀
カサト云振ト云ハ此時ハ小刀ハ振ト云

そのりともて日一なるふくどお目とるごとくしてあらはせ
 らるゑの徳極めけのうート
 上音ふけけいふやけかきき
 及りてあらはせ

三つとち口ふきり 中より奥よひとせ	沖太刀 一腰	沖馬 一疋	空
----------------------	--------	-------	---

御太刀 一腰	御馬 一疋	己上
--------	-------	----

そのり
 ての極め
 の極めり
 り極めり
 四字あり
 又四角
 ら極めり
 一

らるゑの徳極めけのうート
 標号のなりや

一腰と疋の時いたるに

進上	御太刀 一腰	御馬 一疋	空
	<small>四角</small>	<small>終元 中元 平元</small>	

まかすまか飛りけい徳

細川家大御所より御物と奉りし合一枚おて
 ら無り也。この御物お折寄は一枚の御物
 たるに目錄

進上	一腰
御衣	一疋
御馬	一疋
御籠	一疋

料所へ川合あり
 奉りし御物の御衣
 ありて
 御衣の一枚一疋御籠あり

二文折寄付

進上	一腰
御衣	一疋
御馬	一疋
御籠	一疋
御籠	一疋
御籠	一疋

裾服も被せし御衣不
 書りし御衣の御衣
 一疋御衣の御衣
 一疋御衣の御衣
 一疋御衣の御衣
 一疋御衣の御衣
 一疋御衣の御衣
 一疋御衣の御衣
 一疋御衣の御衣
 一疋御衣の御衣

別の物に付いざし

進上	御方	白布	御馬
一膳	一疋	一疋	一疋
			御馬
			御馬

考中よりあるところの目録抄入甚く時板金傍列
 への廣橋及びあるあるところの目録抄入甚く時板金傍列
 たりね目録抄入甚く時板金傍列
 又せらねる是は安記の目録とてあるところの
 安記の目録
 ありあるに 村務抄録とてあるところの
 別取有るは安記の目録とてあるところの
 以平よてはうしやこれらあるは安記の目録とてあるところの
 建水との并 綱子紙からあるところの
 しあやまきしき

瀬太刀	一腰
御馬	一疋
心	
お丹次郎	
利種	

又持家へかひたり
 大中納言家おとに馬
 とくけりて傳書へは所
 太刀御馬と申し
 名宗らりし
 は貞孫楠がと申し
 ともめし

物成りし書と書ふ
 紙のうら
 信長公の
 中御所
 信長公の
 心づかひ
 て書りし
 を心づか
 らしむ也

出づりて お丹次郎	年月日	姓名
お丹次郎	年月日	姓名

これハ目錄のうら
 申し
 書めけりし
 あり
 へふちと
 上りて
 つる也

大抵おとて
 信長公の御
 書と書ふ
 紙のうら
 信長公の
 中御所
 信長公の
 心づかひ
 て書りし
 を心づか
 らしむ也

又

目録の巻小
紙毛平あり

右馬場待合籠

付ハ

年号

月日

非

右馬場待合籠

作九百回

名号あり

とて或る人
とある者
少抄あり付
右馬場待合籠

長洋紙付年と書て遊判を也

これハ家老と書て遊
判あり

口の下と云ふはけり判と

とゆふハ家老と書て判

御家付沙所書ハ後勝五郎百三十三
目録

道工	一腰	私
御大刀	一強	
御弓	一腰	
御袋	一頃	
御馬	一疋	
空		

名号あり

名号

當り小書付書ハ

中ハ右馬場待合籠

派ありと書 弓矢の前

に書とあり

と即武正門書付の目録ハ

大紙付紙あり下

澄ハ糸の色とつ下紙

ひま板の色と付也

細川九条河原守の御親類御坊中々々々々々
古書目録

進上	御大分	御香合	御書	金襴	御鳥	心工
一冊	一冊	一冊	二幅	二巻	一丈	

奥より家系御家人の御親類

金部目録の御親類と云々

主人書人への御親類
萬字の御親類
御書人への御親類
御書人への御親類
御書人への御親類
御書人への御親類

万正

名字官
御

おもひ出けあふく
 下等入後果うごめ
 けうら付ハ名もあき
 あり
 高野入平輩とら古
 のまへ位あり難
 也あづらもあはれ也

百文

水尾中書

管乃小志らりと新あふ起の徳不実うあはれ
リヤウラウロウモウヤウヤウ

以てふ新くたへん
名あり信子信

推升 名あり信子信
名あり信子信

字あり信子信
名あり信子信

字あり信子信
名あり信子信

字あり信子信
名あり信子信

字あり信子信
名あり信子信

字あり信子信
名あり信子信

字あり信子信
名あり信子信

字あり信子信
名あり信子信

字あり信子信
名あり信子信

これの書名をいふと其のうへに書名をいふ
書目録もたつてい

百正

いふにその書名は書目録
は柏原流の書目録
初巻のうへに書名をいふ
来書目録の書目録
とあるゆゑに書目録
をいふに書目録
奉り初巻の書目録
とあるゆゑに書目録

林書目録の書名をいふ

提嬰品

五千疋

伊勢の書目録の書名をいふ
糸のうへに書名をいふ
書目録の書名をいふ
書目録の書名をいふ
書目録の書名をいふ
書目録の書名をいふ
書目録の書名をいふ
書目録の書名をいふ

と書名をいふと書名をいふ

御經 一部

万疋 御簀

以上

その
帛の紙のまじりたるを在りてある友を多く得りてな
どに印しそ者典人多付のふりなりりて事は是れ
に給ふありてはよく也也一投也 （さうりつりつりつと極
ゆへあり）

又

金糸乃丸 進上

約八はま

あり金糸一ね

十由三十五

にまへ

銀子 百枚 御簀典

山内御簀

吉成

是の如くは御簀典は
器の付お納りては
ら極りては御簀典
お納りの付はを
ありあり （御簀典
御簀典のふり面
御簀典のふり面）

御簀典のふり面も
ありあり （御簀典の
御簀典のふり面）

あり古の書も深き之摺抱に盤の先摺馬とい
 盤といふことなるをよりのあつりあひなる
 時よりあつと徳のまらゆらうに好まむと好ま
 とらひ種をまうぐゆぐあつらむと先めしき
 とはなりしとてまじ也

莫も目録といふ

進上	一羽
白鳥	一羽
雁	一羽
鶺鴒	一羽
海月	三桶
望上	

毛刺篋次
 秀煥

是ハ主人夫人へめけ
 莫も教とまのり
 持乃そふ何をけふ
 治て一ノ物に持と手
 魚

目録

一 ね	一 ね	一 天	一 ね	一 ね	一 ね
輪	海	輪	網	房	
坐	光	坐	網	房	

是の書中の書物とて
 多くは目録とあるが
 抄りたるものにすべし
 是をあらは物の名を
 つけしとてよます

或はこれよりなごりたる書物とて
 抄りたるものにすべし
 是をあらは物の名を
 つけしとてよます

一 ね	一 ね	一 天	一 ね	一 ね	一 ね
輪	海	輪	網	房	
坐	光	坐	網	房	

この書中の書物とて
 多くは目録とあるが
 抄りたるものにすべし
 是をあらは物の名を
 つけしとてよます

思へる

進上	十合
御折	十合
御栢	十栢
以上	
菩提寺 養丸	

右月久沙 堂基をくふ付ハ

多とゆぐへく年夏
 もわつとけけ乃号紙
 半あり
 管カケノ流キチチ号ハ
 乃号好号同キ也
 乃号ハ能ク同キ
 実名ハ乃号同キ

進上	松竹
御蓋	十合
御折	十栢
御栢	十栢
以上	
名堂 名木	

おくし命と書き又おの寸法撰きたり乃内よん人
 付ふよわのせとて人とおれ其書と合とせとて
 くゆよ合とらふとて

亦書多れいさとて名字
 友海字書くいよふ及
 今よりいあ書りりと
 ても
 お京助柳十栢とて
 貯りけはとて
 入し書書ハ松竹とて

女中へいせきとら古きまじりぬき書

あんと
十合
十合
十合

御あり
御あり
御あり

はたけのきり 一枚ありたるとお紙りしてよ一枚
て帯へは白梅の黒別はうきとて納てはうらなとて

うけとせは

進上
一 墨子
一 布希
一 大紅
一 座燈
一 丁子
一 上

おまゝのきり
有るまゝ
真
料
あり
あり
あり

きり物へは
とせきとら

●才三 安宅小打紙之事

申 在書室

細川景福

書

為安人されハ

三つありて高申一も
書

沖出と紙もたると
官書と更何れも
純同様字とせしれぬ

人言也

八月廿日 小判

土橋のり

文紙の形は文紙と申
但しにち純九

は多少の誤り

申 式部痛

仁本 秀久

●才四 沙律下久之事

恒秀忠と松平忠房より後へら書は為書
大なる枚少なりおとされを又らたるといふ

忠

元和

十二月廿日沖判

松平肥前守

百任

松平肥前守

元和年十二月廿日

又官ありて六太夫に府中約恒ありてありて
もも極ありてその外の名ありてとあるありて一字
ありてありてありてありてありてありてありてありて

一とお細一とお細一とお細一とお細一とお細
一字一とお細一とお細一とお細一とお細一とお細
一とお細一とお細一とお細一とお細一とお細
一とお細一とお細一とお細一とお細一とお細

天正八年

六月日

維新

一とお細

一とお細一とお細一とお細一とお細一とお細

一とお細一とお細一とお細一とお細一とお細

いよいよおぼつかぬことなり

天の御心

若くは

あり日

名義判

惟久 山右衛門

は逐らばたふさふさたる一先大程めいふる一
これより大いにおぼつかぬ中程一文字計書て月日
名義とらるるをまゝ

第礼集卷中二流

簡礼集卷之三

●才一と快く事

本紙を申し上り上りよおとせねとらるる
いふ六のふりて一約のうらめしき事
上り上り合一扱ねとらるるを押ねとらるる
あり四葉下上り包くあり

と年一勝定地へらるる紙書にきぬん
海よりお遠おてい沙別と名義判とあり
極あり場なり

南禅寺住持職事
任先例可致執務之
状如件
寛文三年七月廿四日
喬智

南禅寺住持職事
任先例可致執務之
状如件
萬治三年三月廿四日
曹智

上巻同前と云はるに按上巻
包れ目内を括弧ひらき
考り下のためありと一足
書末の如く申のてい
るありと云はる沙
下の目より下を二寸

●中二沙若書并中結付移り等のお後の事

沙若書とはことと家原より申すは
一 家原の事と判りたる事一 ねと色も
お、普通の消息ありて為る何れの由ら作
り也仍執務の件年月日たる
と家合我々雄雄信信の統合の
権後と云ふ事な所附年
の執務の事と判りたる事
め件

建武四年七月廿七日 尾法智判

平泉寺在法中

沙弥云くは空の紙沙弥結云く織ふらと云物と云く
と織り分の状の形りと云く云物相の形は結
云物別沙弥ハ空云くは内書其の形りと云くは結
奉書云くは空の形りと云く云物と云くは内書
と云物又の沙弥也内結云くは空云くは内書
内書云くは空の形り也
右沙弥結云く事た云くハ

去月之日 沙教書と月廿六日 平泉寺在法中
款依抄何あく義云く作下作何云く

作するに依りて紙の形を依りて作す

九月廿七日

名号友名系判

雅友又云有り也

結のとは沙弥云く云く并云く云物云くは空云くは内書

云物云くは空の形り也内結云くは空云くは内書

云物云くは空の形り也

云物云くは空の形り也内結云くは空云くは内書

云物云くは空の形り也内結云くは空云くは内書

云物云くは空の形り也内結云くは空云くは内書

判云物云くは空の形り也

お後... 後代の知...
... 付
... 打付
... 事也

● 第三 沙内書 并 口徳... 事

沙内書... 口徳...
... 事

... 頂戴... 口徳...
... 事

十月廿二日

加賀守真吉

往之 沙内書

書判

細川... 口徳...
... 事

沙内書... 口徳...

... 口徳...
... 事

田結皆同級也。是亦少なりとあり。子細ありて
こそ是亦の多利なり。

●才曰 沙巾又之更 再田判物之更

沙巾又ハ後編ノ下ト云々子書判ト云ハ何ハ神田判
也。是ノ人ハ名子ハ名者也。是ハ之ノ方ヨリヨリ更
御らる。主是亦の。年長月日と云々。云々。云々。

○ 田判とあり

下

下 合早^{ハヤク}知^チ周^{シユ}信^{シユ}國^{クニ}と田保^テ事^シ

右為^ニ勳^ニ功^ニ貴^ニ不^レ老^レ也^{ナリ}也^{ナリ}也^{ナリ}

守^ニ先^ニ份^ニ之^レ終^ニ沙^ニ法^ニ之^レ末^ニ也^{ナリ}

親^ニ意^ニ之^レ子^ニ月^ニ母^ニ也^{ナリ}

右等^ト抄^ニ法^ニ之^レ沙^ニ代^ニ字^ニ之^レり^り之^レり^り也^{ナリ}

奉^ニ書^ニ事^ニ状^ニ

○ 田判

下 吉^ニ田^ニ社^ニ能^ニ酒^ニ之^レ出^ニ作^ニ河^ニ流^ニ也^{ナリ}

卿^ニ任^ニ之^レ系^ニ定^ニ補^ニ也^{ナリ} 田^ニ保^ニ事^ニ

大^ニ合^ニ少^ニ人^ニ忠^ニ恒^ニ

有^ニ人^ニ仁^ニ父^ニ如^ニ母^ニ之^レ操^ニ也^{ナリ} 之^レ補^ニ也^{ナリ}

子必先例 邦務事一 正法沙汰
状は御め件 正法遠矣 有下

文永三年十二月日

上右の由判りようごうに作乃 諸候事物とて
わけりまよお調とみこりて代り絶あり

武義園大里郡 然る法節年 忠實下
取成事

右件所止先祖お徳也

一向之下 持も忠光 押領し 傳止
此は 織平 正法 御所

陸園奥 新花園 指勢 自種 余と
と白 沖合 我忠 実務 善人 亦
境下人 苗子 飛子 名 爲 物 貴 件 然 然
地 江 織 子 孫 永 代 正 法 御 所
百姓 亦 御 所 教 正 法 遠 矣

法承六 有下

沙判物 御所 御所 御所 御所 御所
官名 子 忠 文 善 人 御 所 御 所 御 所
乃 沙 判 正 法 御 所 御 所 御 所

武藏國富久屋吉又下流のり長谷川
中務少輔也若守若例二部河は
状め件

嘉仁元年十二月廿日

日下中判の更なるありきハ判判りあむ日下也
久辨子名字及つりあむ載ハあ判判を月日
書流あり

左江國守山部地家事
判判は事早と云ハ勢ハ状件

年一号月日 判判

る我々思つあり

判判判判日下判判ありはらんと云り
判判

●第六 感状之事

感状ハ武幼と云ふトモ感むる状あり侍々々の末
代々々々終り侍人控候よと云ふ人より侍人トシ
る事無しの也ハ武幼と云ふトモ控者ト云ふと
るふより侍人控候よと云ふ物と云ふトモ一書
のりふハ侍人控候也
右判判家と云ふ侍人控候

今月七日平氏乃召兵討擊又百餘騎軍を
お経て備ふ水邊に城をたててよりつと
盛綱が戸の海と渡して約撃しむる者ど
りと進討し事海にわたるはるはる後
もいおきていまも馬を海にわたすこの例
とて盛綱をりまゝい希代に傳へしと
お経ていふ事いふ事いふ事いふ事いふ事
元暦元年三月廿七日申す 頼朝

仙臺の事

信長とわが家屋久

今度お江州の御形様事しと御初十日の社
百法良勢切同方とて籍由家とて徳記
乃武の棟梁

秀吉とわが家屋久

とて度にお金山海邊や浮石父子も外務軍
勢及び那美とていふもの大村直景
中々お及沙流の國に於て名実あて
河内とていふもの名実とていふもの
利とていふもの名実とていふもの
元暦元年三月廿七日

是書あり

中一のり 御朱印

加藤守清のり

うへ御朱印の書はしるしありてありてあり

伊勢守のり 作中ありてあり

家康のりも御朱印あり

と云ふ大板表ありてありてありてあり

后^二親^一切^二書^一法^二親^一志^二神^一妙^二也^一因^二茲^一あり

貴^二方^一石^二目^一録^二拾^一七^二方^一九^二百^一五^二拾^一石

知^二合^一拾^二七^一方^二九^一百^二五^一拾^二石^一目^二録^一あり

中書^二御^一朱^二印^一あり

元和元

十二月十九日 御朱印

在^二中^一あり

同任^二御^一朱^二印^一あり

と云ふ大板表ありてありてありてあり

后^二親^一切^二書^一法^二親^一志^二神^一妙^二也^一因^二茲^一あり

貴^二方^一石^二目^一録^二拾^一七^二方^一九^二百^一五^二拾^一石

知^二合^一拾^二七^一方^二九^一百^二五^一拾^二石^一目^二録^一あり

也

元如光

子より子 御集事

仔細移りてのり

秀吉公よりと清隆父子

と庄公朝経團次河上大明船魁人借移移
お勸め交父子ら及二戦切崩就と万八千
七百余討移極忠功立法統し固氣力は摩
蘇薩別し河上入給ふ有は才心
の一年 目録の事下 身又八島に似たり其
河上物長光父之義江河橋物西宗作

河上物長光父之義江河橋物西宗作

其書元年

西より

河津長原の

日又八島

日付より 遷元 京橋 秀家 村家 家原

各名

秀吉公よりと西

と庄公朝経團次河上大明船魁人借移移
お勸め交父子ら及二戦切崩就と万八千
七百余討移極忠功立法統し固氣力は摩
蘇薩別し河上入給ふ有は才心
の一年 目録の事下 身又八島に似たり其
河上物長光父之義江河橋物西宗作

因茲清之乃一獨定則清之乃正 東之乃正
似初之休之乃正之乃正 國之乃正之乃正
付之乃正之乃正之乃正 捕捕捕捕捕捕捕捕
御書院之乃正之乃正

光緒二十

丙子年 御書院

少初初初初初初初初

東康之乃正之乃正之乃正 乙亥
上之乃正之乃正之乃正 并仙波之乃正
視之乃正之乃正之乃正 系之乃正之乃正
御書院之乃正之乃正

因茲之乃正之乃正之乃正

乙亥年 御書院

東康

初初初初初初初初

去七日也丹波國八田庄 山崎之乃正之乃正
付之乃正之乃正之乃正 初初初初初初初初
初初初初初初初初初初初初初初初初初初

乙亥年 御書院

初初初初初初初初

初初初初初初初初初初初初初初初初初
八月之乃正之乃正之乃正 御書院

山内守正の御事

元飛之御事

山内守正の御事

山内守正の御事

右に延初ゆふふして古月を御事

●中六補任状事

右に補任事 高なるより投取事

たふし知の事 代友織人 合時

補任状事

山内守正の御事

右に延初ゆふふして古月を御事
右に補任事 高なるより投取事
たふし知の事 代友織人 合時

年月日 山内守正の御事

山内守正

人より守正の御事

結文

右に延初ゆふふして古月を御事

右に補任事 高なるより投取事

致事書に由給付従又の務に方らぬ
是御下知極ぞ致し致家の目あり
の件

年号月日

の事

ゆはせしる名字及もせしる事あり

致事書
年号月日

右目ありと致しけりしと致しあり

永禄九 九 廿四 けはせあり

又ハ 永禄九 九 廿四 けはせあり

九 廿四

目ありと致しけりしと致しあり
の事あり

致事書より致しけりしと致しあり
と致しけりしと致しあり

目ありと致しけりしと致しあり
致事書より致しけりしと致しあり

三回と致しけりしと致しあり
物官 新人の事あり

某名を致しけりしと致しあり

土佐本郷庄吉敷名ノ事
右件ノ事ハ永和年中ノ事ナリ
多クハ流シテ所ニ金銀ノ時
以テ本郷庄仁名ノ事ニ
夏ノ末下ノ一札ニ
所ノ流シテ中ノ事ニ
カガ早シ事ニ
シテ本郷庄ノ事ニ
年一長月日判

年一長月日判

物言 古くは善事

某 与言 律条

古くは本郷庄内古歳名ノ事
右如新故ノ事
至徳仁名ノ事
部在月ノ事
依川ノ事
能大才ノ事
是事ノ事
物言ノ事

何程と云ふことか件

年一号月日

三言もそと所人の物と建ておつておつてのとき
後よりよ自あふは意のちよと申すもそのを
書も一冊用ひ給ふ也

二回付

某 年一號月日

久々めとあつて

二言

某 年一號月日

三言 久々めとあつて

三言

某 年一號月日

右何

三言

某 年一號月日

右何

三言もそと所人の物と建ておつておつてのとき
後よりよ自あふは意のちよと申すもそのを
書も一冊用ひ給ふ也

或書

山田孫三郎様へ

右子細の如く致し申上りの事候

年月日

之紙一枚より一端に様々言ふ事あり
こゝに言ふ事なき事あり

別紙あり候事又あり候

様々言ふ事 山田孫三郎

押付候

月日

名

無事沙多り候

尚ほお尋ね候事あり候事

若し尚ほお尋ね候事あり候事

趣あり候事あり候事

● 中二回候事

右様物候事あり候事

と官候事あり候事

● 中三回候事

右様物候事あり候事

物也候事

沖舟被度出入候事あり候事

法書一に収められたる書札
を以て其の筆蹟を考ふるに
上と下とを以て其の筆蹟を
考ふるに其の筆蹟を考ふるに

月日 法書の筆蹟を考ふるに

雅文

又云たあふへ一と推めけ
目録を以て其の筆蹟を考ふるに
その筆蹟を考ふるに其の筆蹟を考ふるに
所記の筆蹟を考ふるに

芳札集書之文

●才一圓場芳札書之文

圓場芳札書之文
芳札書之文

雅文 芳札書之文

雅文 芳札書之文

雅文 芳札書之文

芳札書之文

芳札書之文
天文十年
九月十日

雅

十日

非 非 非 非 非

十二日

と書く^{しる}高橋^{たかね}の付く高橋^{たかね}の付く久^{ひさ}ふ系^{まへ}の付く
勿^な論^{ろん}ふ系^{まへ}の書^かく

●才二首^{さいにしゆ}江文^{えぶん}の書^かく 并^{なら}引^ひ等^{とう}

首^{しゆ}江文^{えぶん}の書^かく^て中^{ちゆう}の^{ちゆう}人^{にん}の^の形^{かたち}の^の分^{ぶん}の^の終^{はつ}の^の可^かき^き得^{とく}
作^{つく}たる^{たると}の^の

康安三年九月六日於薩摩國吉野原及

一 義村捕頭目錄事

首一 柳^{やなぎ}の^の系^{まへ} 蒲^{かき}の^の甚^{しん}内^{うち}付^{つけ}捕^{とら}く

首一 山^{やま}の^の系^{まへ} 乃^の書^かく^て母^{はは}後^ご付^{つけ}捕^{とら}く

首二 細^{こま}田^たの^の系^{まへ} 山^{やま}の^の系^{まへ}内^{うち}付^{つけ}捕^{とら}く

首一 山^{やま}の^の系^{まへ} 河^かの^の系^{まへ}内^{うち}付^{つけ}捕^{とら}く

首一 山^{やま}の^の系^{まへ} 吉^{きち}野^の原^{はら}の^の系^{まへ}内^{うち}付^{つけ}捕^{とら}く

右^{みぎ}の^の系^{まへ}行^ゆ百^{ひゃく}何^{なに}拾^{じゅう}

以上^{いじょう}の^の系^{まへ}の^の合^あ系^{まへ}終^{はつ}り^りの^の部^ぶ令^{たま}ふ^ふ事^{こと}の^の符^ふ受^う
ふ海^{うみ}島^{しま}の^の右^{みぎ}の^の系^{まへ}の^の系^{まへ}何^{なに}百^{ひゃく}と^と半^{はん}拾^{じゅう}也^{なり}也^{なり}也^{なり}也^{なり}

くしやの首と書也首く名ハ山又字く付
多く名ハ大よ半く一

敵く名ハ龍書くく一 かたの体身於る列
あり多し

又今高丈坂ん

はすけりやま

首竹百老

日あり 龍名ハ山中

首何百老

日あり 龍名ハ山

首何百老

日あり 龍名ハ山中

これハ惣目録也

之云

首何百老と記する付し等くつかりありし事

くまれりし事傳の事老の事とやするもの事

わびに秘傳なるもの事秘を釋しとふハけ

一ハしよらうらう一ハ秘し守のけり人目

見ゆらうらうわびに事と傳く書付ふ

うらうらうのこを秘そなうらう秘と半始

あけしとてあけありし事

は又し伝書之めけもたふ

康安又支九月六日刻合戦討捕首何百老

御手廻

首一 柳伝記

蒲伝甚内討捕者下

首一 山名記

乃重丹後討捕者下

大山甚年

山中角生捕

首一 細田之角

は徳寺波 吉原元年 お討ち下

首一 吉原角

吉原元年 吉原元年 討捕ゆり

陸川なる一もいふ

右日か

首数何れも何百餘人ば肉生捕何人とも追討

ふちねや

松原まどいさ原中いりて追くぬち徳寺又お

紙と目家おのり

古老の曰首は又お軍中角と記と首記

といふ又甚款よ句いといふとある首記に

に記と句いと名刺のふゆあるかやた

るハ首ハ一といふけりつと一縁ととも句ハ

雑一といひ玉片三片 伝まらへ

又曰軍中ハ首記連て方の句ハ大進物日記ハ

徳寺の役あり又曰徳寺徳寺の去りハ

徳寺ハ首記徳寺ハ首記ハ徳寺ハ首記ハ

差別ある下ハ首記徳寺ハ首記ハ

つ井ハ首記徳寺ハ首記ハ首記ハ

● 中三 既札 事

その法は妙なるけしきも人ふよるべし
道つたのちと主人の御目ふけりてその礼を
のらぬでけりてさ極いまのちもよるべし
とまふく一さふ首のなまふ友一方に捕らひぬ
とあるしねとたがよけりて又首ふりて身ふ
とほりあつては仰首のちたがひぬるべし
れとは松板にけりて五分とて一やうに
しらふまうりて極いけりてびつたの身れびく
とつて海にけりて也
後からたれめと職とて極いけりての身とては

しつちあつては耳のたれとて又た湯めり
よの義もつて
或はよふて守申さすもいふて
又一紙よ書板

首一 を 名 を 記
三十一
川原と守討捕

○ 柳 鴻 九 郎

当流の場

ちんねんたふく...
あはれ...
傳者...
出...
帳...

●中又...
標...

去病
鉄炮病
討死
右...
吉川...
大...
徳...

去病
鉄炮病
討死
右...
吉川...
大...
徳...

又

去病
鉄炮病
討死
右...
吉川...
大...
徳...

後山修之場

付丸

と書流るありと

めは事々しくと軍の証をりり

又

若福内書

教名字を頼向肩先

左腕よりわくこと

若川書書

教名と付丸

りけい書流るあり

後方より首領より肩先よりと書流る軍中

よむらへて事々しく別書しく別書しくことんを

おね取流るありおねけりし事々しくことんを
とくことんを流るありし事々しくことんを
事々しくことんを流るありし事々しくことんを
事々しくことんを流るありし事々しくことんを

●中六軍用流る事々しく

凡軍用りし流る付丸ありし事々しくことんを
一と二と事々しくことんを流るありし事々しくことんを

武野燭の書

か極く極字のさしお極よ書也

筆目よ是事の極くすけりうらうら書り
てわりうら書りし極よせりこれあは
しきしうら書りし極よせりこれあは
へし極よせりし極よせりこれあは
いし極よせりし極よせりこれあは
いし極よせりし極よせりこれあは
いし極よせりし極よせりこれあは
いし極よせりし極よせりこれあは
いし極よせりし極よせりこれあは
いし極よせりし極よせりこれあは
いし極よせりし極よせりこれあは

の字ありし極よせりし極よせりこれあは
書りし極よせりし極よせりこれあは

具是極よ極のありし極よせりし極よせりこれあは
うら書りし極よせりし極よせりこれあは
へし極よせりし極よせりこれあは
いし極よせりし極よせりこれあは
いし極よせりし極よせりこれあは
いし極よせりし極よせりこれあは
いし極よせりし極よせりこれあは
いし極よせりし極よせりこれあは
いし極よせりし極よせりこれあは
いし極よせりし極よせりこれあは

後乃よ極よ極のありし極よせりし極よせりこれあは
いし極よせりし極よせりこれあは
いし極よせりし極よせりこれあは
いし極よせりし極よせりこれあは
いし極よせりし極よせりこれあは
いし極よせりし極よせりこれあは
いし極よせりし極よせりこれあは
いし極よせりし極よせりこれあは
いし極よせりし極よせりこれあは
いし極よせりし極よせりこれあは

きり微感ハ微号とくふも同義あり用礼
大引馬まきこころ中或人ころりさ
志を起して徳をま討のさまわらぬいや
但多事なるは終終多きか一通さるる
傍ハ難おまもあふ一
徳をふつみそ水月とするぐん

●中七白書抄

勢して白書の抄して字中ふ用あり大徳を
白書ののこあり世なるは流布一の方
徳酒 ころりさるるあふるを思ふ

淨行 ころりさるるあふるを思ふ

梅梨 ころりさるるあふるを思ふ

ころり世なるあふるのさ抄はあふるのさ
もあふる目よいと考とあふるあふる一様
口傳

後からせ世なるふ抄智あふるねはあふる
一切のさるるあふるのさるるは徳とらあふる
ころり世なるあふるのさるるあふるの
もあふるあふるのさるるあふるのさるる
水のころりさるるあふるのさるるあふるの

